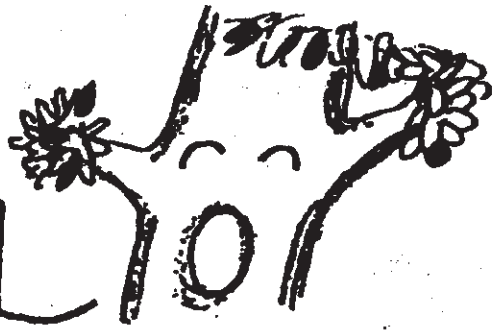


関西 第45号

ECOMAIL10



関西 ECOMAIL

関西支部会員のみなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員のみなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

第9回 全国トンボ市民サミット 神戸大会のおしらせ

○とき: 1998年8月22日(土)・23日(日) (詳細はネットワーク欄)

○ところ: 神戸市シルバーカレッジ 他

○大会スケジュール

22日(土) ●エクスカーション(野外トンボ見学会 3コース)

●交流パーティー

23日(日) ●基調講演 河合 雅雄(元(財)日本モンキーセンター所長)

●分科会(3会場)

●サミット全体会議

第9回 全国トンボ市民サミット 神戸大会 事務局 078-392-1577

第45号 目 次

・21世紀に向けての環境教育

—日本環境教育学会第9回大会シンポジウムのまとめ— (赤尾整志) … 2~3

・環境教育学の構築へと高まるエネルギー! (福島 古) … 4

・第66回関西ワークショップ(6/27)報告

フィリピンの教育事情—環境教育への取り組み— (秋吉博之) … 5~6

・津崎優子の詩のコーナー

… 6

・ネットワーク

… 7~8

21世紀に向けての環境教育

——日本環境教育学会第9回大会シンポジウムのまとめ——

赤尾整志

カナダでは広大なウィルダネス空間がクリアー・カット（森林の大量伐採法）によって破壊されている一方、ネイティブ・サイエンスの見直しが行われている。グロリア・スナイヴリーさん（ヴィクトリア大学教授）が記念講演で話された内容を基調にして、コーディネーターの谷口さん（甲南大学）の、「地球規模に立つ日本の環境教育を時間・空間の広大なフレームで考えてゆくために今、環境教育学が問われているのではないか」という導入で、シンポジウムが始められた。

最初に、環境教育における実際的な体験を強調する川嶋さん（滋賀大学）が、現在日本が海外で行っているODAとは何なのか、ベオグラード憲章（1975年）から以降世界の環境問題は好転したかなどマクロな問題提起を行って、地球規模での環境対策はかえって深刻化している現状を訴えた。それは現在の50歳世代が、子供のときにまともな環境教育を受けていなかったという卑近な理由によるとすれば、知識教育に終始しがちな今の学校教育を改善しない限り、将来においても同じ結果の繰り返しになる。環境教育にとっていま大切なことは子供がどんな大人になれるかである。そのためには、学校教育においてもっと現実的な体験のできるカリキュラムを考えなければならない。このように川嶋さんはまず環境教育のいま直面する本質的な側面に向けて問題を投げかけた。

わが国の戦後自然保護教育の草分けを担ってきた金田さん（財・日本自然保護協会）は、「自然に親しむ」自然観察会が時代とともにその意義や方法がどう移り変わってきたか、指導者養成の豊富な経験から語った。そして自然保護運動の目的として地球の環境保護が最重要となった今日、環境教育は地球環境問題の多くがブラックボックスであるという困難に直面している。言葉として例えばラムサール条約や生物多様性保護条約は知られていても、その実態をほとんどのひとは直接に体験し難い。このような地球規模の自然保護の現状から、自然観察もその方法が問い直されなければならぬという指摘がなされた。

2人のシンポジストによるこのような見解に応じて、グロリアさんはカナダの先住民が大自然の変動を地域に住む生きものから気づく知恵を、2000年の長い歴史の中で培ってきたという話をして、そのネイティブ・サイエンスが西洋の近代科学知にも勝ることを強調した。またフロアからも、北海道石狩川におけるサケを迎えるアイヌの行事の中に生活の知恵が見いだされるとして、このような先住民の生き方を風化させてはならないという意見が出された。

ここでさらに議論を深めるため、コーディネーターの谷口さんから、第9回大会特別企画「現在の環境教育に欠けているもの」で発表された意見をくくった司会者の報告が求められた。しかし短時間では議論を尽くし難いと司会者側の判断で、この場では「新しい環境教育学は、学校にしても企業においても、既存の領域内で既成の発想を繰り返すだけでは出てこない。」という結論的な感想を述べるに止められた。(内容は別記特別企画まとめ参照) また同様に大学教育においても、現行の各領域を総合化するだけでは不可能で、抜本的に教育システムの改革が求められるといった意見が出された。

この時「会場のクーラーを切ってください」と抗議的(?)な申し出があり、続いて、高校や大学は、卒業者が企業に入ってからでも生かせる環境教育をするべきだ。企業も環境を会社のイメージアップの具にすることを止めて、企業自身の実益につながる(生き残れる)環境運動に転換するべきであり、それが可能な社会システムの変革を望むといった突っ込んだ声もフロアから挙がった。一方、前日の「明日香村」フィールドワークショップ参加者からは、農業に携わる人たちとの対話によって、昔の農の知恵が今の農業の中にも息づいていることを実感した。環境教育は自然を守るとともに人も大事にする、自然と人間の共生を目標にした教育であってほしいという希望が述べられた。

ブラックボックスの多い環境保護。しかも蓋を開ければパンドラの箱となる環境問題に対して、環境教育はこれからいかに対応してゆくべきか。そこで再び話題を自然学習にもどして、知識だけの学習から身体を動かして直に学ぶ環境教育の基本的な方法論にふれた議論に及んだが、時間不足でいま一步の突っ込みに欠いた。

最後にグロリア・スナイヴリーさんから農薬をめぐる自然保護問題について、カナダでは先住民の知恵が最近科学的分析結果によっても立証された。このように土地の人々の中に眠っている宝をいま掘り起こすことによって、新しい環境教育への道が開かれるに違いない。これからの環境教育にはスピリットをもったアクションを。というエールが送られた。

コメント：環境教育学会設立10年目を迎えようとしている前夜。数々の環境教育の実践に根差した方法論にいま共通する原理とは何か。そして第9回大会のシンポジウムはその答えを得るためのジャンプボードになったのだろうか。目前にある21世紀の日本の教育改革には、新しい教育学の構築が必要である。環境教育はそのためにも重要な役割を果たしてきたことは事実であるといってもよい。それだけに近い将来に向けての環境教育学会会員の責任も大きい。

環境教育学の構築へと高まるエネルギー！

特別企画講演・・・「現在の環境教育に欠けているもの」を探る

大会実行委員・グローバル環境文化研究所 福島 古

お忙しい中、特別企画講演をして頂いた皆様方に深く感謝致します。なによりも、講演時間の少なさを創意と熱意で補完して頂いたことに対しても紙上をお借りして厚くお礼申し上げます。

また、特別企画講演のスタイルに関しては、「15分講演、リクエストによる指名論争、総合討論」と言う3部形式を予定していたのが、時間の都合上不成立となってしまったことによって、参加者の皆様には不満足感が残ったことでしょうか御容赦願いたい。

この特別企画講演が「現在の環境教育に欠けているもの」を探り、環境教育の跳躍と環境教育学の模索への更なる新風とならんことを切に願っている。

さて、「現在の環境教育に欠けているもの」を探るとはどのようなことなのだろうか、大会の余韻の残る間に考えて見たい。以下、その一部を報告する。

A会場に於ける指摘は以下の要点になるのではなかろうか。

- ①感性・風土や魂・世論（人間環境論的な）の多くはインプリントもしくは誘導によって過去もしくは現在・未来に渡って受け継がれる大河の流域のようなものである。
- ②ある世代の環境を評価する場合、環境計測（技術）・制度・政策等の再認識が必要である。それらは現在の地域環境の水準を良く映し出しているからである。
- ③今後の環境教育として取り組むべきは、「新しい文化・文明」を持った生活者の数を増やしていくことである。これを「文化としての科学」を共有した「環境文化圏」の形成と考える。

結局、「環境教育に欠けているもの」とは「欠けていることの認識」と「大河の中に位置関係を見つけだす」ことではなかろうか。環境教育学の構築もその大河の一滴である。人類の歴史・生活史の中で、特に資源・エネルギーとりわけ自然環境の「消費」に焦点をあてる必要がある。同時に「欲望」についてもである。ここにこそ、環境教育を全体（自然と人工、生態学、政治・経済、技術、社会、法律、文化、エシックス）としてとらまえる命題のもつ重要性があるのではなかろうか。環境教育学の構築とは、そのようなことを達成するための「教育の復権」である。つまり、全分野でリスクマネジメントを実行する基礎・技術開発・制度・文化を創造していく「教育事業」とも言えるのである。

フィリピンの教育事情 —環境教育への取り組み—

秋吉博之（兵庫県加西市立北条中学校教諭）

1. フィリピンの教育

1994年度のDECSの予算は391億2000ペソで、国家予算全体の10.8%である。1986年から1991年の支出内容を見てみると、DECS予算総額の85%から93%が人件費と保守・運営費に使われており、教育機材、教育施設といった環境教育の整備に充てられる予算は15%以下で慢性的に不足している。

2. 日本の教育援助

日本の政府開発援助は1994年の実績では123億4000万ドルで、4年連続して世界最大の援助供与国になっている。日本から援助を受けている国・地域のなかで日本が最大の援助国は34ヶ国に及んでおり、例えばフィリピン共和国（以下フィリピンと略す）では403万7500ドルで援助総額の53.3%となっている。

3. フィリピンの現地調査

1995年8月と1996年8月の2回にわたってフィリピンで現地調査を行なった。1995年の夏にフィリピンを訪れたときは、事前に準備をお願いしていたので、過密スケジュールであったが得るものは多かった。フィリピン滞在中には、門番に厳重に守られている地区にあるJICAの専門家の宿舎に宿泊し、マニラのJICA事務所、フィリピン科学技術省、ケソン市のフィリピン大学との往復が続いた。このなかでフィリピンの本当の顔を見ていなかったように思う。せいぜいマニラの中学校で物理、化学、生物の授業を見学したあとに、とても明るい生徒と接したこと、さらに通りすがりに路地の奥をかいま見たことぐらいであった。日本への帰途、マニラ空港へむかう車中で見たストリートチルドレンの姿が忘れられない。交通渋滞で停車した車にすりついて物乞いをする母子に出くわした。その母子を私はどうすることもできなかった。現地人の運転手もげげんな顔をして無視するだけであった。高級乗用車に乗りマニラ空港へ向かう私が、その母子にはとてつもない金持ちに見えたことだろう。これがフィリピンの現実の一部であることを忘れてはいけない。私は何のためにフィリピンにきたのか。何のために環境教育につ

いて学んでいるのかと自問した。常に現実を見つめることから出発しなければいけないことを改めて考えさせられた。

4. ケニアでの国際協力

今年8月下旬から2年間、国際協力事業団の専門家としてケニア共和国に派遣される。ケニアのようすをエコメールでお知らせする予定である。

派遣先の機関 Kenya Science Teachers College
(ケニア理科教員養成大学)
P.O.Box 30596, Nairobi, KENYA

津崎優子 詩のコーナー

雷雨

— 金剛山頂にて

それぞれの色を
主張しながら
あちらの谷とこちらの谷から
はいのぼる雲が
出会う時

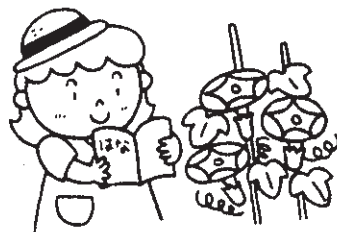
たえきれなくなった
エネルギーが はじめて
空の色が
瞬時に かわる

風神
雷神

畏れるものに
恵みをもたらす

自然の神々の降臨

津崎優子詩集『水の色は地球の色』より



ねっとわーく

第9回 全国トンボ市民サミット 神戸大会 (詳細)

22日(土) エクスカーションの3コースとは

- ・北コース「自然豊かなため池群と六甲山のトンボ」
吉川町のため池群、六甲・摩耶山あじさい池
君影小学校ビオトープ、ドジョウ復活の取組 他
- ・中央コース「公園池のトンボと水辺保全団体との交流」
御影小学校ビオトープ、奥須磨公園、塩屋台公園
名谷小学校ビオトープ、垂水下水処理場ビオトープ 他
- ・西コース「平池のため池のトンボと巨大オニバス」
清水谷池、統台小学校ビオトープ、神出自然教育園、明石西島大池
オニバスフォーラムと合流 他

※各コース共 最後に『震災メモリアルパーク』を見学

集合場所は **新神戸駅(新幹線)** 1階11:30~受付 12:30出発です。【参加費1,000円】

23日(日)

オープニング(10:00~)・**基調講演**の場所は神戸市シルバーカレッジ

(神戸市北区しあわせの村内)【参加費無料、大会資料代500円】

10:30~『水辺の記憶』河合 雅雄(かわい まさお)

京都大学名誉教授、兵庫県立人と自然の博物館館長
サルから人への進化の研究が専門



3分科会(13:00~)の内容は

- ・第1分科会 環境学習『もっと自然を知りたいな』
- ・第2分科会 市民の環境保全活動『みんなで身近な自然を考えていこうよ』
- ・第3分科会 都市と「農」『農はみんなのたからもの』

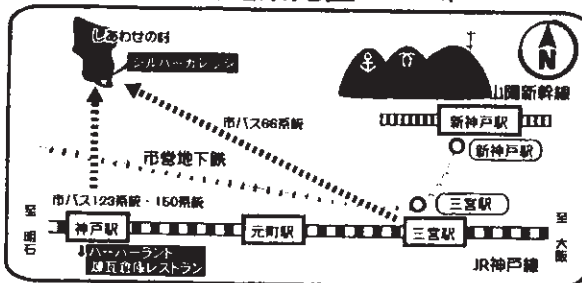
サミット全体会議 は15:00~16:00

申込・問い合わせ

申込方法はファックス、郵送、E-mailがあります。電話で問い合わせてください。(1ページ参照)

ホームページ:<http://www.hyogo-iic.ne.jp/~INS93003/tombo/> E-mail:eld@po.hyogo-iic.ne.jp

会場への交通案内図



○しあわせの村へは

▼三宮駅前
神戸市バス66系統
『しあわせの村』行き
片道(470円) 所要時間 40分

▼神戸駅前
神戸市バス125-150系統
『しあわせの村』行き
片道(250円) 所要時間25分
が便利になっております。

ネットワーク

■君は古代人になりきれるか

- 日時 8月6日(木)～8日(土) 2泊3日
- 場所 箕面市立吉少年教学の森
- 内容 従来のキャンプのように決まったプログラムは用意していません。活動したいことを1分で見つけ、自分の意志で決定します。とにかくチャレンジしてみるという姿勢を大切にします。
- 対象 小学3年～中学生
- 定員 20名(先着順)
- 参加費 20,000円(保険料、教材、6食分ほか)
- 申込法 下記までお問い合せください
- 問合せ 少年少女文化財教室
- 申込 申込 TEL.0727-29-7318

■第2土曜 子ども自然教室 「谷川の涼を求めて」

- 日時 8月18日(土)10:00～小雨決行
- 集合 近鉄信貴山口駅
- 場所 高安山(八尾市)
- 内容 暑い夏の一日、森林や谷川で涼しさを味わいましょう。沢ガニと戯れるのも楽しいよ。
- 持ち物 弁当、水筒、筆記用具、軍手、雨具、あれば観察用具。山歩きの服装で参加ください。
- 参加費 無料

- 申込法 事前申込みはいりませんが、多人数の場合は事務局まで。
- 問合せ 八尾自然保護の会
- 申込 申込 〒581-0818 八尾市美園町4-60 佐々木方 TEL.& FAX.0729-97-7675 (20:00～22:00)

■府民の森体験キャンプ

「トウインクルトウインクル夜空のお散歩」

- 日時 8月14日(金)～15日(土)1泊2日
- 場所 大阪府民の森 ちはや園地(下早赤阪村)
- 内容 標高1000メートル、大阪で最も夜空に近く、一番涼しいキャンプ場で楽しむ、親と子のふれあいキャンプです。
- 対象 親子(子どもは小学生以上)
- 定員 約15名
- 参加費 小中学生4,000円、高校生以上4,500円

- 申込法 往復はがきに参加者全員の住所、氏名、年齢、性別、電話番号、キャンプ名を明記して7月15日～30日の期間にお送りください(消印有効)。1葉で4名までです。

- 問合せ (財)大阪府農とみどり環境の整備公社ネイチャーイベント係
- 申込 申込 〒541-0053 大阪市中央区本町1-4-8ひし富ビル3F TEL.06-266-1038

■自然史講座

「大阪市内で繁殖する鳥」

- 日時 8月8日(土)15:00～16:30
- 場所 自然史博物館 集会室
- 内容 大阪市内で繁殖する鳥の情報を集めたり、市内の公園40カ所以上で繁殖している鳥の調査を行いました。都市に生きる鳥の暮らしを紹介します。
- 参加費 無料(ただし入館料が必要)
- 申込法 当日受付
- 問合せ 大阪府立自然史博物館
- 申込 申込 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23 TEL.06-697-6221

■千里リサイクルプラザ

家具・木工教室(2日間コース)

- 日時 8月8日(土)・8月9日(日)
- 場所 千里リサイクルプラザ(くるくるプラザ)
- 内容 ガーデニング小物作り、プランタースタンド作りを行います。
- 参加費 1,000円
- 定員 40名

- 申込法 往復はがきに、服し名、住所、氏名、電話番号、年齢を明記して下記までお送りください。

- 問合せ (財)千里リサイクルプラザ
- 申込 申込 〒565-0826 吹田市千里万博公園4-3 TEL.06-877-5300

自然体験観察園

～田圃の草取りとこども自然教室～

自然体験観察園でお米づくりの「草取り」体験と、田畑の自然観察・工作などの環境教室を開催します。夏休みの一日、楽しく自然環境について学びましょう。

- 日時 8月2日(日)10:00～15:00 雨天決行・雨具用意
- 場所 環境学習センター(生き生き地球館)と自然体験観察園
- 対象 小・中学生とその保護者
- 定員 20組(申込多数時抽選)
- 参加費 無料
- その他 お茶・お弁当持参。汚れてもいい服装(着替え)
- 申込方法 往復はがきに郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を記入のうえ、環境学習センター「自然体験観察係」あてに申し込みください。
- 申込締切 7月20日(日)(当日消印有効)

関西ECOMAIL

第45号 1998年7月24日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室)気付

〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1

(TEL&FAX) 0729-78-3381 [直通]

第46号は 1998年9月30日発行予定 原稿必着期限9月22日

E-mail: m979344@ikoma.cc.osaka-kyoiku.ac.jp